

## Book Review 13-7 戦争 #イスラエルとパレスチナ

『#イスラエルとパレスチナ』（ヤコヴ・ラブキン著）を読んでみた。著者はカナダの歴史学者、モントリオール大学教授。敬虔なユダヤ教徒であり、「シオニズムはユダヤ教の教義に反する」と批判している。ユダヤ研究とイスラエル研究の分野でも貢献している人物であり、著書の「内側からの脅威：ユダヤ人による反シオニズムの歴史」はカナダ総督文学賞最優秀翻訳賞にノミネートされた。

ほんの 57 ページの岩波ブックレットであるが、読み終えてイスラエルへの怒りが収まらない。

本書は、2023 年 10 月 7 日のパレスチナ人武装勢力による越境攻撃とそれに対するイスラエル軍の報復軍事攻撃を契機に緊急出版された。

現在のイスラエルとパレスチナの関係を理解するには、まずシオニズムとは何かを理解する必要があることが本書を読んでわかった。

シオニズムとは、ユダヤ人の祖国復興を希求する政治運動や思想である。ユダヤ教、ユダヤ・イディッシュ文化の復興を目的としており、イスラエルをユダヤ人の「祖国」として支持する政治的志向を指すこともある。

シオニズムの主な特徴は

- 18 世紀頃から東欧で誕生した。
- 旧約聖書に記されたエルサレムのシオンの丘を指す「シオン」の名前にちなんで、聖地パレスチナにユダヤ人の国家を建設することを目指した。
- 1897 年にバーゼルで第 1 回シオニスト大会が開かれ、諸国への働きかけが続けた。
- 1917 年のバルフォア宣言に力づけられて多数のユダヤ人がパレスチナに移住し、1948 年にイスラエル国家が樹立された。

シオニズムに反対する思想や運動を「反シオニズム」と呼び、イスラエルの正当性を否定する立場をとる。反シオニズムは世界的に広がっており、イスラエル内外のユダヤ人の多くにその主張者がいる。

本書は、ユダヤ人である著者が反シオニズムの立場で執筆した書である。著者の簡潔な説明を記すと「シオニズムは、ユダヤ教の集団を 1 つの民族に統合

し、共通の言語（ヘブライ語）を与え、パレスチナの土地に移住させ、支配させようという、19世紀の終わりに欧州で生まれた政治運動だ。宗教用語を多用するが、他の者への同情や調和、親切心といったユダヤ教の教えとは根本的に相容れない。無神論的とも言える。」

イスラエルとはシオニズムに基づいた（帝国主義でレイシズムの）国民ユダヤ教の国家（ユダヤ人国家）であることがわかる。

著者は、ユダヤ教の根本はトーラーの規定する戒律を遵守することとしている。トーラー（torah）とは、ユダヤ教の聖書（タナハ）における最初の「モーセ五書」のことである。また、それに関する注釈を加えてユダヤ教の教え全体を指す場合もある。トーラーはヘブライ語で書かれており、「教え」という意味を持つ。

それによれば、当初ユダヤ人は神罰によってユダヤ人は追放の身であること（パレスチナには戻れない）を弁えていたし、ユダヤ人はこの地の生まれではないとしている。これがユダヤ教の根本概念なので、真のユダヤ教からするとパレスチナにユダヤ人を世界各地から集めることは根本概念に反することになる（ユダヤ教は「約束の地」パレスチナへ戻ることが目的の一つと思っていたが、真っ赤な嘘であった）。

現在のイスラエルは、真のユダヤ教徒からは遺棄すべき存在と考えられている。イスラエルが存在し、パレスチナ人に対して抑圧と殺戮を繰り返しているのは米国をはじめとしてドイツや欧州諸国の途絶えることのない支援があるからだ（侵略されたウクライナを支援し、侵略するイスラエルを支援する米国の政策はダブルスタンダードではないか！）。南アフリカがアパルトヘイト政策で世界中からバッシングを受けて体制を一掃して出直してきたのに、イスラエルが世界の政治指導者やマスコミから支持されている現状（イスラエルが非難されず、パレスチナのみバッシングを受ける）は不思議でならない。希望は、カネも力もない若者たちが世界各地で反イスラエルで反旗を掲げて行動していることである。